# 増大するデータ量 への対応



# ⑦増大するデータ量対応

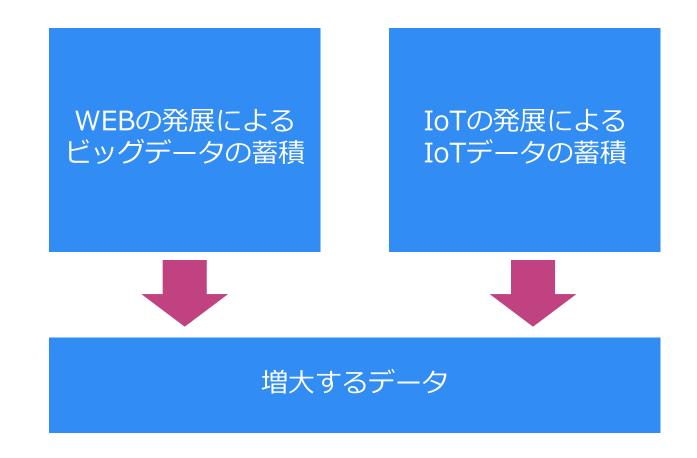
IoT/ビッグデータなどで絶えず増加するデータの保持を効率的に実施する





#### 増大するデータ

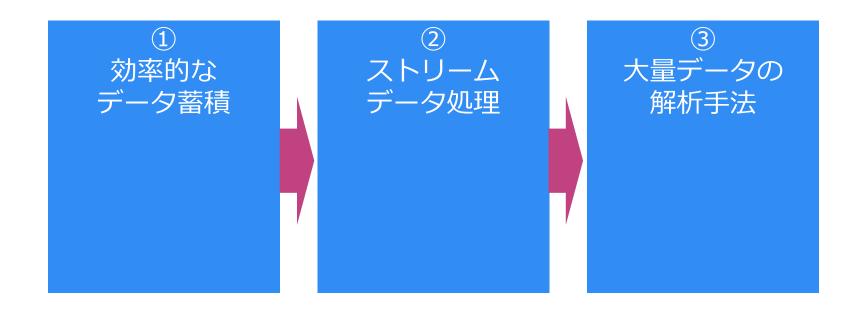
WEBの発展によるビッグデータ蓄積とIoTの発展によるIoT データ蓄積によりデータ量が大きく増大





### データ量への対応

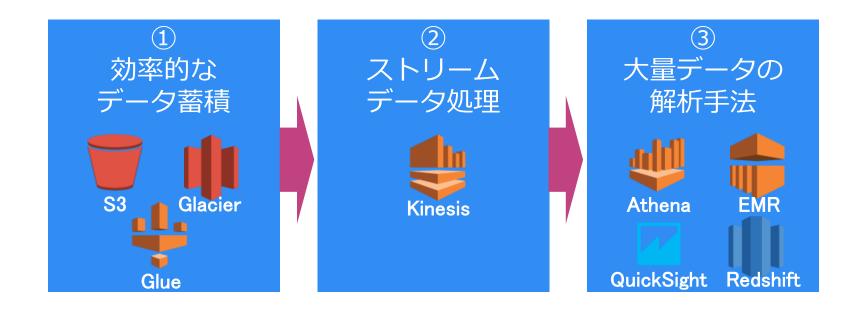
効率的なデータ蓄積とIoTなどの大量のストリームデータ処理 や解析の方法が必要不可欠となる





### データ量への対応

AWSは大量なデータ処理への各段階において必要なサービスが 提供されている





### ビッグデータに必要な技術

ビッグデータに対応したデータ蓄積・処理技術が必要不可欠

Volume 大量データ ✓ 大量のデータを効率的に蓄積可能な データベース技術

Variety 多様なデータ ✓ 多様な形式のデータを蓄積可能なデータベース技術

Velocity 速い処理 ✓ 高速処理が可能なデータ処理ソフト ウェア/ハードウェア

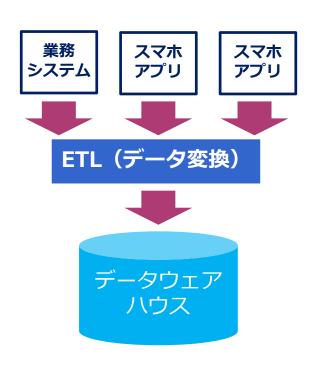


#### データレイクの活用

#### ビッグデータ活用の中心はデータレイク型データベース

#### データウェアハウス中心

利用用途に応じたデータを貯めて活用する データウェアハウス



#### データレイク中心

出来る限り生データをほぼ全データ保存するデータレイク



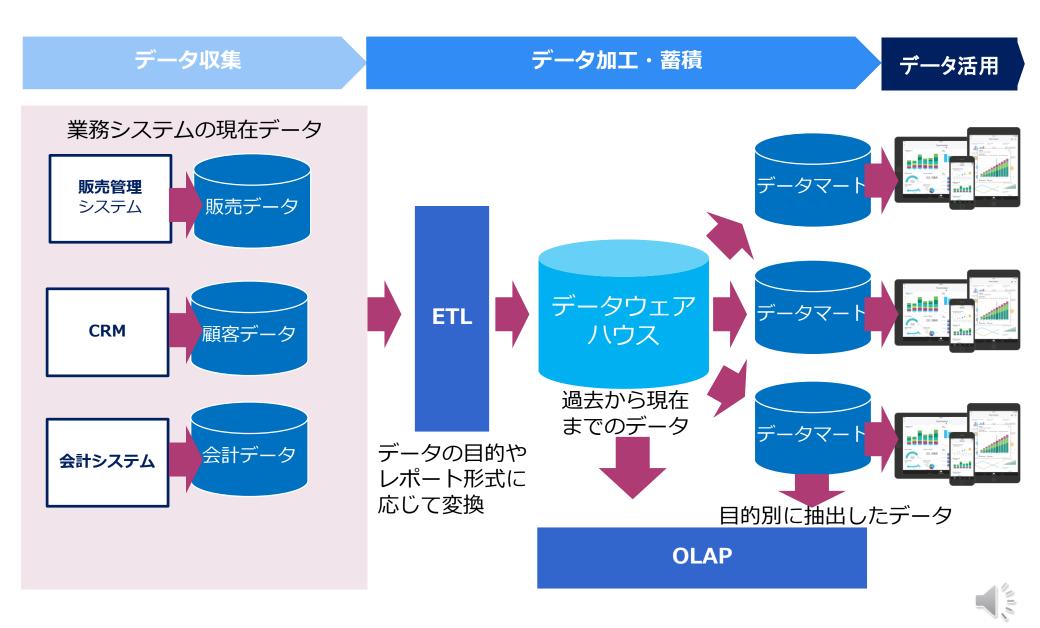


# データレイクの活用

#### データレイクでは全データを生データのまま保存する

	データウェアハウス中心	データレイク中心
データ収集	<ul><li>✓ 目的別データ</li><li>⇒必要なデータのみを抽出・収集</li><li>✓ 構造化データ中心</li></ul>	✓ 生データ+目的別データ ✓ 構造化/半構造化/非構造化データ
蓄積	✓ 必要なデータのみを抽出・蓄積	<ul><li>✓ 変換しないで生データ形式で保存</li><li>✓ もしくはエッジ処理したデータを 保存</li></ul>
処理•加工	<ul><li>✓ 関連するデータ構造(スキーマ) に変換・蓄積</li><li>✓ SQLによる操作</li></ul>	<ul><li>✓ 事前にスキーマ(データ構造)を 定義しない</li><li>✓ SQL/SAS/MapReduce/R/NoSQL などで操作</li></ul>
可視化 分析	✓ 利用者がデータ分析/レポート内 容などの利用目的を事前に特定し 構築	✓ 事前に目的を定義せず、ユーザー がデータ群から新たな価値を抽出 しデータを解釈・活用

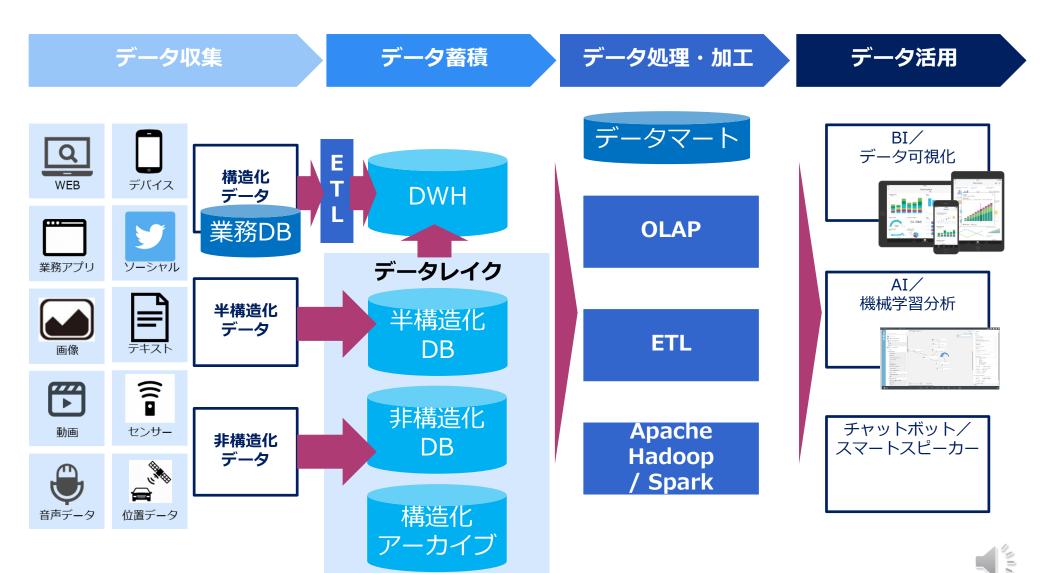
# データウェアハウス型のデータ処理基盤



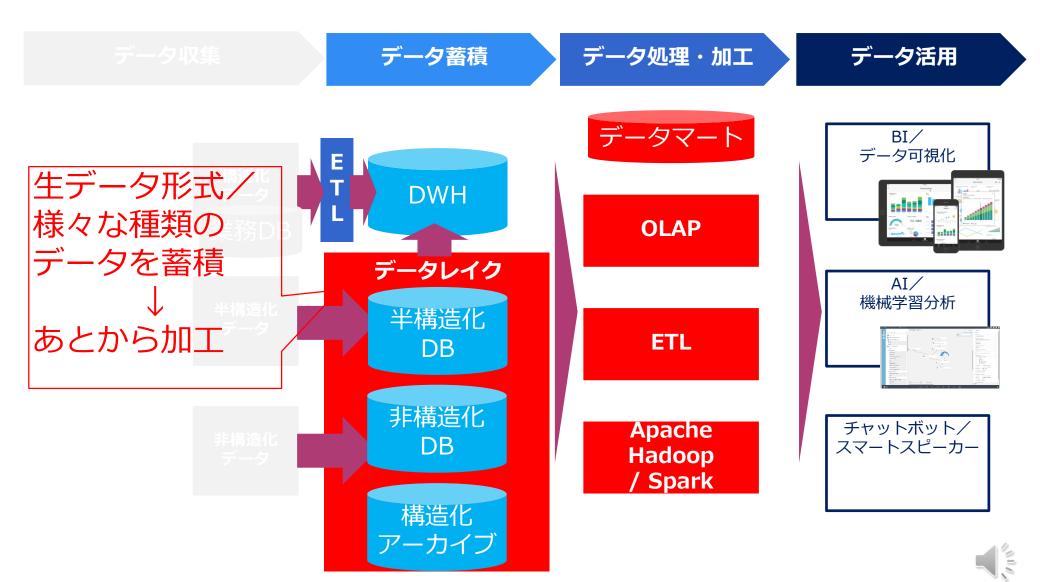
# データウェアハウス型のデータ処理基盤

データ加工・蓄積 データ活用 データマート 事前に保存する データとその構 造を決めて変 換・保存する **ETL** ハウス 過去から現在 までのデータ データの目的や レポート形式に 応じて変換 目的別に抽出したデータ **OLAP** 

### データレイク型のデータ処理基盤



### データレイク型のデータ処理基盤



# Apacheシリーズ

ビッグデータ分散処理向けの代表的な仕組み(ミドルウェア)がApacheシリーズ

大量データバッチ処理向け

ストリーミング処理向け

Apache Hadoop

Apache Spark



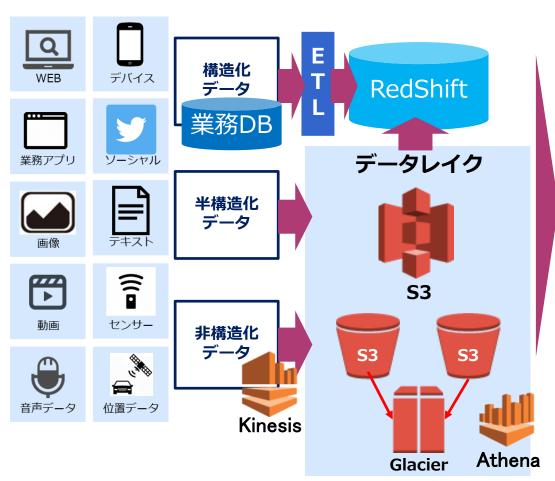
# AWSのデータレイク構成

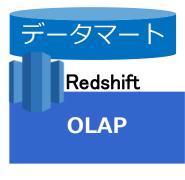
#### データ収集

#### データ蓄積

#### データ処理・加工

#### データ活用







**EMR** 



チャットボット/ スマートスピーカー

